

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◇◆◇ No.0592 ◇◆◇

20/07/15

## 【ドル/円に台頭する「4年連続小動き」の危機感】

ここ最近、ドル/円の動意が非常に乏しい。たとえば、非常に大雑把に捉えた106-108円のレンジ取引もすでに1ヵ月を超えてきた。「新型コロナウイルスの世界的な拡大」、そしてそれを受けた米株を中心とした大混乱もあり、途中まで順調な変動をたどってきたものの、確かにこのままでは過去3年と同じような「年間を通して小動き」とどまりかねない状況だ。

実際、そんな危機感を早くも口にする向きがジワリと増え始めているが、筆者が年間の変動率10%以下と平均(16%強)を大きく下回った過去3年と、今年の相場を比較してみると、幾つかの気になる符号も観測されている。以下で報じてみたい。

### ◎過去3年は年間変動のほとんどを4月までに完了、以降はレンジ取引

ドル/円が一年間でどの程度動くのかを示す「年間変動率」は、変動相場制以降の平均でおよそ16.05%となっている。しかし、2017-19年の3年間はそんな過去の平均値を大きく下回る変動にとどまっており、順に指摘すると9.66%、8.80%、7.56%一だった。

ここ数年の為替相場の変動は緩やかな右肩下がりで、昨年はずいぶん平均値の半分以下しか動かなかったことになる。

これはさすがに由々しき事態。そして、4年連続小動きを回避すべき、「今年こそは」という捲土重来の思いで2020年がスタートしたものの、1月相場は変動幅2.65円、変動率2.44%にとどまり、スタートダッシュに失敗した。がしかし、「新型コロナウイルスの世界的な拡大」、そしてそれを受けた米株を中心とした金融市場の大混乱もあり、ドル/円は今年3月に2016年11月以来となる、月間変動幅10円超の大相場を記録するなど、大きく巻き返している。

その結果、変動率も3月の段階で10%を超えるなど、過去3年間の年間変動を早くも上回る結果に。「明るい未来」が垣間見えたかに思えたが、以降は鳴かず飛ばずの状況だ。

では、ここから先、年末にかけてはといったどういう値動きが予想されるのだろうか。

改めて指摘するまでもなく、11月上旬には当初今年最大の注目材料と目されていた「米大統領選」が予定されているほか、香港問題を中心とした「米中の対立」や、頑なに米国との対話を拒む「北朝鮮情勢」、もうすでに兆しもうかがえる「新型コロナウイルスの第2波あるいは第3波の襲来リスク」など、注意すべき世界情勢、いわゆる「材料」は目白押しだ。そうした意味では、期待感も込めて「まだまだ市場が大きく動意づくチャンスはたくさん残っている」と言えるかもしれない。参加者のひとりとしては、期待せずにはいられないところだろう。

しかし若干気になるのは、右表をみてもわかるように、2017年以降の過去3年間は、年間を通して単に小動きだっただけでなく、その変動のほとんどを年の前半、もっといえは4月までにほぼ終え、以降はおおむねレンジ取引をたどっていること。つまり、ドル/円相場の年間変動は、年末に向けて徐々に戻すぼみの動きとなる傾向があるようにも思われる。

前段で指摘したように、材料的には確かに依然として注目要因が目白押し。しかし、たとえば「新型コロナウイルス」の話も、明らかに以前より市場の感応度は落ちている。社会全体としては、まだまだ予断は許さないものの、結果としてそれが為替、ドル/円の動きに反映されないのかもしれない。あまり考えたくはないが、「4年連続のドル/円小動き」についても、いまから頭の片隅に留めておいて損はない気もしている。(了)



